

創られた「シーボルト事件」

—「台風」・「座礁」・「禁制品発覚」の結びつき—

海老原 温 子
宮 崎 克 則

はじめに

呉秀三氏は1896（明治29）年に『シーボルト』（120頁）を出版した。その後も調査研究を続け、30年後の1926（大正15）年、大幅に加筆し史料編も追加して『シーボルト先生 其生涯及功業』（1532頁）を出した¹。

『シーボルト先生 其生涯及功業』はシーボルト（Philipp Franz von Siebold, 1796-1866）に関してその生涯、日本滞在中の活動、日本研究における業績、日本への貢献などを膨大な資料を駆使して詳細に紹介した名著であり、今日もシーボルト研究の基本書となっている。呉氏は『シーボルト先生 其生涯及功業』において、「シーボルト事件」の発端について、

間宮宛封包の発覚して後四ヶ月に、長崎の大風雨ありて、シーボルト先生の積荷中に禁制品ありしこと発覚し、それより二ヶ月にして、シーボルト事件は公けの沙汰となれり。

と結論づける。この記述のみでは理解できないので、補足説明する。シーボルトは1823（文政6）年、オランダ政府から日本の総合的科学的調査の任務を与えられ来日した。そのため医師として西洋医学の伝授と交換に日本の「博物」資料を精力的に集める（収集品はオランダのライデン国立民族学博物館などに

現存)。彼は民族資料の他に植物・動物・鉱物も集め、さらに最新の日本地図を入手するため高橋景保と接触する。高橋は幕府天文方の中心人物であり、地誌編纂と蘭書翻訳の任務を兼ねていた。伊能忠敬の測量結果を「大日本沿海輿地全図」として完成（文政4年）させたのも高橋であった。1826（文政9）年に高橋とシーボルトは江戸で会う。出島にいたオランダ商館長は年1回（1790〈寛政2〉年から4年に1回）、江戸へ参府して將軍に謁見し、貿易継続のお礼を述べ、献上品を進呈した。これにシーボルトは医師として随行した。江戸参府は、シーボルトにとって日本の国情を直接視察できる好機であり、ロシアの動静と極東アジアの地理に強い関心を抱いていた高橋景保にとってもシーボルトの知識を得る絶好の機会だった。高橋はシーボルトに接触し、シーボルトがクルーゼンシュテルン（ロシア海軍提督であり探検家。1803年に遣日使節レザノフと仙台藩出身の津太夫ら4人の日本人漂流民らを乗せ、ロシア海軍のバルト海の軍港クロンシュタットを出港し、カムチャツカ半島から日本に向かう。長崎で日本との貿易開始を交渉するが不調に終わる。帰国した彼は詳細な航海記を出版）の航海記を所持していることを知ると、その入手を切望した。交換に、シーボルトは日本の物産記録や日本・蝦夷の地図を要求した。

1828年5月（文政11年3月）、長崎のシーボルトから江戸の高橋へ手紙と小包が届き、その中に間宮林蔵宛のものも同封されていた。高橋はそれをシーボルトの依頼どおり間宮の屋敷へ届けた。小包をみた間宮は、差出人が外国人だったので、外国人との交信を禁止している幕府の規定に従い、開封せずに勘定奉行村垣淡路守へ届け出た。奉行所で中味を調べたところ、なかには手紙と輸入品の更紗（ビロードの布地）が入っていた。手紙はオランダ語で書かれており、シーボルトの署名もあった。その内容は「間宮林蔵の学問的業績に敬意を表すあかしとして、この花柄模様の布を進呈する。また、ヨーロッパに帰国後、他国の地図を送る。ついては、蝦夷の植物の押し花をいただけませんか」というものだった。奉行所では手紙の内容でなく、これを届けた高橋とシーボルトの関係に注目し、高橋の身辺調査を開始した。

そして、同年9月17日（和暦8月9日）夜半から18日朝にかけて長崎地方を

台風が襲う。シーボルトが乗る予定であったコルネリス・ハウトマン号は長崎港内の稲佐村の海岸に座礁し、その浮上作業を通じて積荷物を検査したところ、禁制品の日本地図・葵の紋付帷子などが次々に見つかった。結果、高橋景保は逮捕されて獄死（後に死罪の判決）、シーボルトも嚴重な取調べを受け、1829年に国外追放の処分を受けるに至った。そのほかオランダ通詞など数十名の関係者が処罰された。

このように、呉氏の成果をもとに「シーボルト事件」は、間宮宛の手紙を契機に捜査が開始され、座礁した船から禁制品が発見されたことによって明るみとなった、と理解されてきた。こうした「語り」は『国史大辞典』（吉川弘文館）においても、

文政9年江戸参府以来交際のあった幕府天文方高橋景保との通信贈答などは、一部幕吏のひそかに注意するところとなっていたが、同11年3月高橋および普請役間宮林蔵に届けた彼の贈り物が官憲に知られ、幕吏は高橋の身辺をひそかに看視していた。同年8月9日長崎地方を襲った暴風雨のため、彼がその荷物を積込んだ蘭船コルネリス＝ハウトマン号が稲佐海岸に擱坐し、船体を損傷した。その修理のため積荷を一旦卸した時、彼の荷物から、当時外国人の国外持出しを禁ぜられていた物品が現われた。この事件から2ヵ月を経た10月10日、高橋は町奉行所に逮捕され入牢、子小太郎・下僚下河辺林右衛門以下数人も捕われた。ついで11月1日急使が長崎に到着、長崎奉行はシーボルトを抑留して商館長預けとし、出島各所を探索して多くの物品を押収、また和蘭通詞吉雄忠次郎ら多数の関係者が捕えられ、それぞれ入牢・町年寄預け等々の処分を受けた。

とあり、現在でも根強く通説となっている。しかし、梶輝行「蘭船コルネリス・ハウトマン号とシーボルト事件」（『鳴滝紀要』第6号、1996年）は、オランダ商館長メイラン（Germain Felix Meijlan, 1826〈文政9〉～1830〈天保1〉

在任)の日記を分析し、座礁した船には船体を安定させるためのバラストとして輸出用の銅500ピコルのみが積み込まれており、日本地図などは積み込まれていなかったという。

本稿では、座礁したオランダ船には銅のみが積み込まれていたにもかかわらず、なぜ「台風」-「座礁」-「禁制品発覚」という「シーボルト事件」が創り出されたのかを検討する。併せて1828年9月17日夜から18日朝(文政11年8月9日~10日)にかけて、九州北西部を襲った台風に関する気象学者の研究も紹介する。本稿では西暦を主体とし、和暦は基本的に()内に示す。

〔1〕「シーボルト台風」に関する気象学研究

1828(文政11)年の「シーボルト台風」については、気象学者たちによって、古文書に残る記録やシーボルトの観測記録などから台風の強さや進路が推定されている。そのいくつかを紹介しながら、実際どのような台風であったかを検証しよう。

①1954年 永山盛善「日本の測候史上におけるシーボルトの業績」(『天気』4月号, 日本気象学会)

永山氏は、シーボルトが日本滞在中に気象観測を行っていたことを紹介し、台風の接近時の気圧を、彼が母親へ宛てた手紙(1829年2月20日付)から紹介している。要点をまとめると、

- ・ 西洋では気圧の観測値を示すのに仏インチと英インチがあり、シーボルトは江戸参府時の観測では仏インチを、出島の観測では英インチを使用していた。
- ・ 1828年9月17日朝のシーボルト観測によると、気圧計29.73インチ(1006.7mb)、寒暖計76°F、湿度計89%、東の微風、晴
- ・ 1828年9月18日午前0時ごろ、シーボルトの自宅2階が崩れ落ちる寸前の

観測によると、気圧計28.1インチ（951.6mb）、寒暖計77°F、Saussure製の湿度計97%、南東の台風（括弧内の数値は永山氏がインチをミリバールに換算したもの）

となる。永山氏はシーボルトの観測結果や『日本気象史料』²⁾により、台風の経路を「長崎の南西海上より上陸、佐賀、福岡、下関近傍を通過して日本海に入ったものと思われる」と推定し、台風接近時の「気圧28.1インチという値を、気圧計の海面上の高さを6～7メートルとして海面の値に直してみると948mb位となり、これは長崎測候所創立以来の最低気圧95.6mb（※950.6mbの誤りか）よりも低い値になる」と述べている。

②1961年 根本順吉「シーボルト台風」（『自然』10月号，中央公論社）

根本氏は「1828年9月17日に九州を襲った過去300年間中の最大の台風を“シーボルト台風”と名づけたと思う。理由は、この台風が有名なシーボルト事件の一つのきっかけとなったからであり、またこの時の気象状況は出島の蘭館において、シーボルトにより、つぶさに観測されたものだからである」という。これ以降、気象用語としても「シーボルト台風」という呼称が使われるようになる。

③1962年，高橋浩一郎「過去300年間のA級暴風雨」（『天気』9月号，1961年8月気象庁の月例会での報告を掲載）

高橋氏は「A級というのは室戸台風，枕崎台風，伊勢湾台風程度のもをさし、10年に1回くらいおこるもので、現在においては、死者500名以上，全壊家屋数5000以上，あるいは流失家屋1000以上の被害を生ずる程度の暴風雨である」と定義づける。明治以前のものについては『日本気象史料』を用い、古文書などの被害状況から台風の中心示度，最大風速，最大総降水量などを見積もり，その結果，過去300年間に日本に来襲した台風で最大のもは文政11年8月9日の台風（「シーボルト台風」）であると結論づけた。

高橋氏が推定した台風の被害状況は，死者数10,000人，全壊家屋数49,000棟，

半壊家屋数24,000棟，流失家屋数2,800棟である。この被害状況から彼は，「シーボルト台風」の中心示度900mb，最大風速50m/sec，総降水量300mmと推定する。しかし，残念なことにシーボルト測定の気圧データなどは利用されていない。

④2010年 小西達男「1828年シーボルト台風（子年の大風）と高潮」（『天気』6月号）

小西氏は『日本高潮史料』³⁾や「前代未聞実録記」⁴⁾などを参考に，台風の経路と通過時刻，被害状況を推定している。小西氏が推定した「シーボルト台風」の経路は，

久留米において風向きの順転（風向が時計回りに変わること）「九日の夜四時半（0時）頃より暴風起り，初めは北東風にて辰巳（南東）に廻り，尤烈敷」（『米府年表』）が，門司において風向きの逆転「亥の刻（22時）より……巳午（南南東から南）の方より風吹きければ……風いつしか寅卯（東北東から東）の方に吹きかわして」（『門司叢書』）と記されている。（中略）「前代未聞実録記」には，「八月九日夜九つ時より，九州国々北東の風吹出し，……夫より段々と風は辰巳（南東）へ廻り，強く吹きける。……猶も風厳しくなり，未申（南西）へ廻りて吹きたて……」とある。著者は佐賀本庄（佐賀市本庄町）に居ることから，佐賀では風向きは順転となり，その北部を台風が通過したと考えられる。さらに秋月でも「九日夜九つ頃より大風，雨も烈しく降り，初め北風暫らくして南風となり，後には西に変わり」（『福岡県災異誌』）とあり，順転であったことがわかる。よってシーボルト台風は佐賀，久留米，秋月の北部を進み，門司の南を通過したと考えるのが妥当である。（中略）

一方，『甲子夜話続編』に長崎県五島列島の小値賀，壱岐ではほとんど被害がなく，平戸でも被害が軽かったことが記されており，台風中心の経路は平戸よりも南であったと思われる。長崎で係留されていたオランダ船や

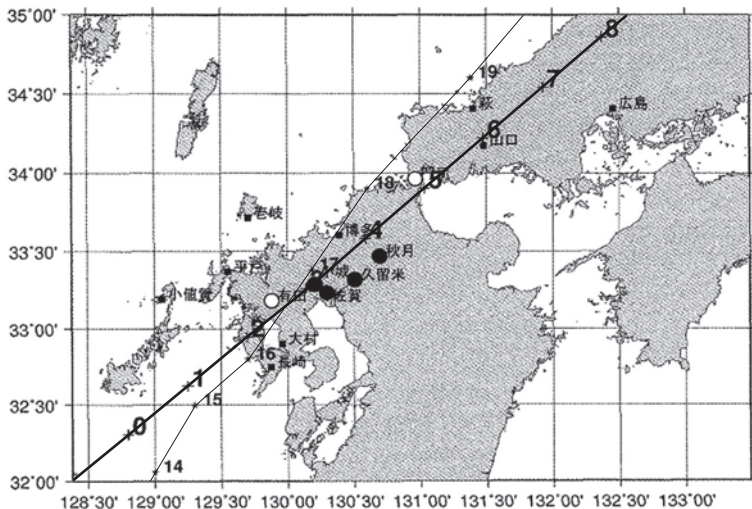
唐船が出島側から稲佐山側へ流されたことなどから、長崎の北側を通過したと考えるのが適当である。

という。小西氏が利用した各地の史料の詳細は注に記す⁹⁾。「シーボルト台風」の経路は、長崎県西彼杵半島に上陸、佐賀市北部を通って北部九州を縦断し、周防灘から山口県へ再上陸となる。これは永山氏推定の経路とほぼ同じである。

その後の経路について、小西氏は『鍋島直正公伝』⁶⁾の「此颱風は斜に北陸奥州までも吹き荒したりしが、其与へたる損害は非常にて、我が肥前の三十一万石を筆頭に、加賀の七十八万石、仙台の四十三万石……長州の十三万石、石芸州の十二万石と見ゆ」という記述から、山口県を通過した後に石川県の西を通過し、新潟県から秋田県で再上陸したと推定している。

小西氏は「シーボルト台風」と類似の経路・勢力を持った台風として、1991年の台風19号（9月27日、別名リング台風）をあげ、「シーボルト台風」の経路と通過時刻を推定している（図1）。この図から上陸地点を長崎県西海市大

【図1】小西達男氏が推定する「シーボルト台風」経路



シーボルト台風の北部九州の経路（1828年9月18日）。●は古文書の記述による風向の順転地点。○は反転地点。細線は台風第9119号の経路（1991年9月27日）。経路上の数値は台風中心の通過時刻を示す。

瀬戸町付近と仮定すると、「シーボルト台風」の上陸時中心気圧は935ヘクトパスカルになるという。また、高潮の被害状況などから、このコースは九州北部にとって極めて危険であると結論づけた。

参考① 2002年 財城真寿美・塚原東吾・三上岳彦・Können, Gunther P. 「出島（長崎）における19世紀の気象観測記録」（『地理学評論』75巻14号，日本地理学会）

財城氏等は，1819（文政2）年から1828年にブルムホフ（Jan Cock Blomhoff オランダ商館長，1817〈文化14〉～1823〈文政6〉在任）とシーボルトらによって観測された記録がドイツのボフム大学に収蔵されていることを紹介し，この記録は日本においては最も古いヨーロッパ式の体系立った気象観測記録であると評価している。

筆者が調査したボフム大学図書館には，シーボルトの個人的なメモや手紙，門人が提出したオランダ語論文が所蔵されている。その中に「Meteorologische Beobachtungen vom 23 September 1827-ultimo Sept. 1828」（No：1.142.002）の小冊子がある。これは1827年9月23日から1828年9月末までの出島における観測データの記録である。図2は1828年9月のページであり，観測結果の数値が書き込まれており，9月17日「シーボルト台風」時には次の特記がある。

Am Abende Sturm aus SO gegen 12 Uhr Organ nach 12 Uhr der Barometer 28.4

訳すと，「夜に南東の風の嵐，12時ごろ颶風⁷⁾，12時過ぎの気圧28.4」となる。つまり17日の夜に南東の風の嵐がはじまり，夜中にかけて猛烈な暴風雨に一変した，という当日の様子が読み取れる。12時過ぎの気圧は28.4（インチ）とあり，この値は他の日時の値と比べると極端に低く，「颶風」=台風がかなりの規模であったことがわかる。しかし筆者は気象学についての基本的知識がないので，シーボルト観測のデータが気象学専門家によって活用されることを望む。

参考② 2009年 松浦章『海外情報からみる東アジア-唐船風説書の世界』
(清文堂)

松浦氏は第3編4章「“The Canton Register”」に掲載された1828年長崎暴風雨]において、中国の広東で1827年発行された中国初の英字情報誌 “The Canton Register” の記事を紹介している。1829年1月3日付の記事に「シーボルト台風」の記事がある。

我々は長崎から次の情報を得た。それは南京を経由してきた土着の航路を通じて運ばれてきた手紙を受け取ったものである。9月17, 18日の間の夜に、日本人の回想によれば決して前に経験したことがなかった恐ろしい台風が長崎湾に襲来した。そしてその名前の町で最も大きい部分、及び出島も破壊された。長崎湾において、700以上の人々の生命が失われた。オランダ船の Cornelis Houtman Captn.de Tong (Jong カ) は海岸に打ち上げられた。10月18日に、この報告が出されたときもまだ、彼女は浮かんだ状態にはなっていなかった。しかしながら同船は次の大潮が来るのを待ちこがれている。オランダ船の乗組員も出島商館の紳士達のいずれもが命を失うことはなかった。

これにあるように、文政11年8月9日夜の台風情報が年を越えて中国の広東まで伝えられていたのである。情報源は中国船、とくに南京船にあったと松浦氏はいう。

[2] 「台風」・「座礁」・「禁制品発覚」の検証

梶輝行「蘭船コルネリス・ハウトマン号とシーボルト事件」は、商館長メイランの記録をもとに、ハウトマン号に積み込まれていたのは輸出用銅500ピコルのみという。このことを、メイランの『Japans dagh register gehouden in't comptoir Nangasackij』(蘭館日誌) から確認しよう⁸⁾。ハウトマン号が8月6日(和

暦6月26日)に入港手続きを完了した後、暴風雨襲来の前日まで、どのような貿易業務が行われたかを時系列的に紹介する。

- 8月8日 (和暦6月28日) 貿易業務の開始
- 8月9日 個人荷物の荷揚げ開始
- 8月13日 「積荷目録」の提出
- 8月16日 本方荷物の荷揚げ開始
- 8月20日 贈物荷揚げ開始, 倉庫ドールンへ
- 8月27日 訛物・脇荷物荷揚げ開始
- 9月1日 最後の砂糖積下ろし完了
- 9月2日 バラストとして銅500ピコル積み込み
- 9月5日 目利役立合いで荷物仕分け
- 9月9日 (和暦8月1日) 日本の八朔
- 9月13日 甲板長オウエマンス死去
- 9月16日 貿易品の商人下見
- 9月17日 夜中大嵐, 長崎市内・出島の被害甚大, コルネリス・ハウトマン号稲佐へ座礁
- 9月18日から27日まで記載なし

8月6日に入港したハウトマン号は順調に荷揚げ作業を進め、9月1日には最後の砂糖を降ろし荷揚げ作業を終了している。9月2日には船体のバランスを保つため、輸出用の銅500ピコルがバラストとして積み込まれた。この他の記事は、七夕・お盆などの行事やオランダ国王の誕生日のこののみで、何かの荷物を積み込んだという記述はない。梶氏の指摘通り、9月2日に銅500ピコルが積み込まれた後、16日まで何も積み込まれていないことを確認できる。

梶氏によると、ハウトマン号の座礁後、積荷から禁制品があらわれたという記述は中島廣足『樺島浪風記』(1833〈天保4〉年刊)にあるという(もともと呉氏が『シーボルト先生 其生涯及功業』において指摘)。中島廣足は熊本藩士、30歳で隠居し、1828(文政11)年には長崎に滞在して実際に「シーボルト台風」に遭遇した。彼は(和暦)8月7日の昼過ぎに長崎を熊本藩の船で立

ち、9日樺島付近で潮待ちをしていたときに暴風雨に襲われた。船は難破し11日奇跡的に長崎に帰り着き、街中の被害を目の当たりにした。その記述をあげる。

大浦乃方より見やれば、海かたづける家々はみなくづれて、ありしおもかげもなし、まづ近く見えたる阿蘭陀館、うみにのぞめる高樓なかばよりくづれおちたり、…中略…御社にては諏訪宮乃回廊、舞台、寺にては崇福寺の唐門、また春徳寺の本堂・楼門・鐘楼、さては佐賀の殿乃濱への御館…中略…阿蘭陀船のさばかりおほきなるも、碇づなたえて、稲佐の濱なる、志賀某が家乃門の前乃なぎさにぞ吹きあけたる

彼は長崎の被害状況とともに「阿蘭陀船」が長崎港内の稲佐村海岸に座礁したことを記述しているが、この部分に座礁したハウトマン号の積荷検査と禁制品発覚の記述はない。禁制品の発覚は跋文に当たる巻末に、

こたびの大風は、まさしく神風なりと世にいひながせるはさる事ありたり、かの阿蘭陀船はこたびかへるべきときにて、其船乃中にわが国乃地図をはじめて外国にわたすことをいみじくいましめたまふ物どもを、たれか取つたへけむ、くさぐさつみいれ、ものしいたるを、此大風にあひて、船（*オランダ船）をふきあげられしかば、やがてこなたの司人（*役人）たちゆき見て、つみ入たる物どもとりおろし、とかくせらるゝついでに、さるものども（*禁制品）みなあらはれ出て、ことごとにおほやけにめしあげ、取をさめられぬ…

天保四年正月十五日檀園のあるじ（*中島廣足）、長崎のたびやどりにて、ふたゝび此よしをしるしぬ

とある（「図3」）。したがって、積荷検査と禁制品発覚は『樺島浪風記』が刊行された1833（天保4）年に追記された、と梶氏という。筆者も同意見である。中島廣足は国学者で歌人でもあり、平田篤胤に「西の国にて古へ学をおこすは廣足を頼みにおもうなり」と期待されており、歌集の他に随筆や紀行文など著書も多く、また彼を慕う門人も多かった⁹⁾。その中島が実際に台風に遭遇し、九死に一生を得た経験を書き記したものであるから、『樺島浪風記』の巻末にある「台風－座礁－禁制品発覚」説は、信憑性をもつものとして巷に広まったであろう。

中島が取り上げた「台風－座礁－禁制品発覚」の噂は、『樺島浪風記』が刊行される以前の『甲子夜話』にその原型を見ることができる。『甲子夜話』は、平戸藩9代藩主松浦清（号は静山）が隠居した後の1821年12月11日（文政4年11月17日）の「甲子」の夜から書き起こした随筆集である。『甲子夜話続編』卷二十一に「シーボルト事件」の記事がある¹⁰⁾。その情報源は「長崎の人より予が中の者に文通せしあり」とあり、長崎在住の人から江戸の松浦静山側近へもたらされた「十一月十五日」付（1828〈文政11〉年）の手紙によるという。静山は「実否は外人の知る所に非ず、徒風説のまゝを記す」と記し、「風説」であると明記している。「風説」の内容は2点あり、1点は高橋景保からシーボルトへ送った日本地図などを長崎奉行所で取り上げたこと、関係するオランダ通詞などが捕縛されたことを伝え、続けて、

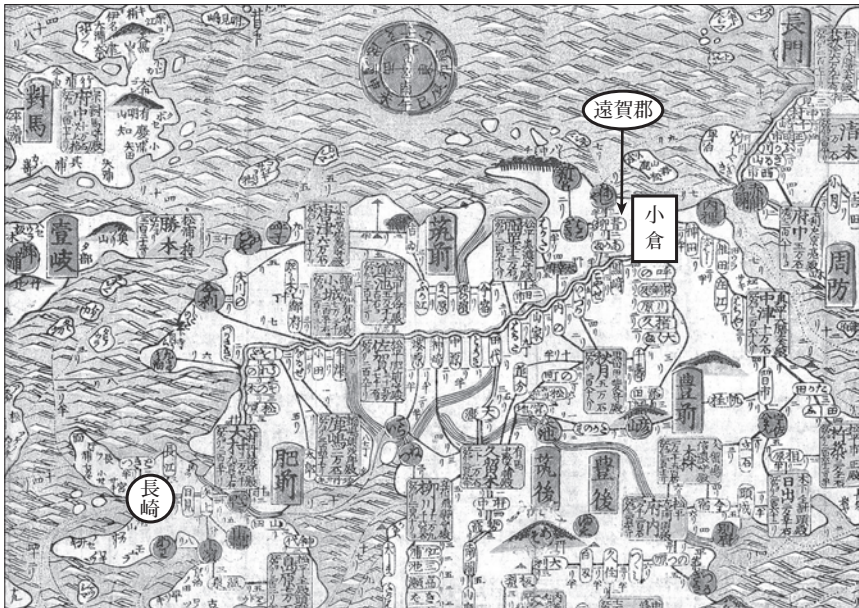
一、阿蘭陀船も浮方出来、来月十日頃には出帆可仕由に御座候、前文シイボルトは相残候様被仰付候。右之通大風雨に而蘭船不及難洪候はゞ、最早シイボルトも品々積入、無滞出帆可仕之処、其儀不相成、誠に神風にも有之候哉と風聞仕候（後略）

とある。これには、座礁したハウトマン号は浮上し「来月十日」に出帆予定とあり、台風が来なければ、シーボルトは難なく禁制品を持ち出すことができたであろうが、台風のために予定通り出港できなかった、これは「神風」の恩恵

である、とある。また「シイボルトはヲロシヤ人に而は無御座哉」という噂もあるという。松浦静山へ伝えられた長崎の「風説」に、座礁したハウトマン号の積荷から禁制品が発覚したことはないが、シーボルトからの日本地図没収とハウトマン号座礁は同じ手紙にまとめて伝えられている。この後、『樺島浪風記』に見るような「台風－座礁－禁制品発覚」の「風説」が形成されたていったことは、容易に想像できよう。

九州における長崎街道の起点である小倉藩の大庄屋日記をあげよう（図4）。小倉藩城下町に近い企求郡小森手永の大庄屋を務める中村平左衛門（寛政5〔1793〕年～慶応3〔1867〕年）が書き綴った日記¹¹⁾によると、文政11年記事の最後にその年に起こった各地の事件や災害がまとめられ、その中に、

〔図4〕天保頃『大日本早見道中記』（部分）



「長沼文庫」555（九州大学記録資料館九州文化史資料部門蔵）

一、当秋八月十日の大風にて、阿蘭陀船長崎の湊ニ有之候を岡ノ小高キ所ニ吹上ケ候よし、已然の所ニおろし候事甚六ケ敷、方々より参り段々積り方等致候へ共、甚大造の銀目にて急埒不致、夫是延引致候内右船中ニ日本の兵器等有之候を見掛、夫より委敷相改候処兵器夥敷、専一日本の地図委敷相記候書類等も有之、段々御吟味有之候所、江戸天文家の内蘭人と密談ニおよひ、日本を覆ス謀計有之候由、其外江戸にてか担の人も多ク御大名様方ニも有之由、其外筑前・肥前辺ニも一味の者追々ニ分り候由風説有之候、右蘭人ハヲロシヤの人近来蘭人と号し参り候ともいふ説あり、甚敷異変にて候

とある。要約すると、台風でオランダ船が座礁し、浮上作業が難航して出航が遅れている間に、船中に兵器等があるのが発見され、委しく調べたところ禁制品の日本地図なども発見された、さらに調査を進めていくと、「江戸天文家」（高橋景保）と「蘭人」（シーボルト）による「日本を覆ス」謀反計画も発覚した、このオランダ人は「ヲロシヤ」人という噂もある、となる。「台風」・「座礁」・「禁制品発覚」は見事に結びつけられ、シーボルトは日本転覆を狙うロシアのスパイとして語られている。

次に、長崎街道に近い筑前国（福岡藩）遠賀郡鬼津村の庄屋井口家に伝わる『年曆算』¹²⁾をあげる。これは明治9年頃に編纂されたと考えられ、風俗・習慣、諸行事、経済状況などを記す。この中の文政11年の項に、

長崎ニハおらんだ船山ノ鼻ニ吹上られ、御しニ御国・肥前郷夫数万人参り候へ共、十月末迄御りす、两国御物入也、肥前之者工夫仕出し船おろしたりと言、此者御扶持米・金子ヲも被下候由也、

（中略）

扱長崎唐船おろしと言ハ空言^{ウツ}にて、船中御改メ之処、日本之画図所持せり、武具武器等も有り、定而謀叛人之輩同意せしか、日本之役人も御うたかい掛ル衆多し、御国吉田殿も閉門、蘭学者を抱られしより御不審掛り蘭方医者衆も段々御詮議有りしとかや

とある。内容は、座礁したオランダ船の浮上成功のニュースが伝わった後に、その話は虚言であり、船を検査したところ、禁制品の日本地図などに加えて武器なども発見され、謀反の疑いがあるとして、多くの人に嫌疑がかけられたそうだと、いうものである。『年曆算』は後の編纂物であり2次史料であるが、中村平左衛門の日記は当時の記録であり、1828（文政11）年の末頃、長崎でなく小倉の地で人々が「台風－座礁－禁制品発見」を語り始めていたことを確認できる。シーボルトは、約25年前の1804（文化1）年に長崎へ来航し貿易を求めた（使節はレザノフ）ロシアと結びつけられ、日本転覆を企てる人物として語られている。

一方、長崎の記録にはどのようにあるのだろうか。古賀十二郎氏が唐人番倉田氏の日記から出島に関する部分を抜粋した『紅毛庫雜撰』¹³⁾によると、

（文政11）

八月九日、夜大風津波地下近国迄大破、出島部屋之破損、十五番蔵砂糖百五拾籠、カピタン部屋姿鏡其外流失、（中略）唐蘭船共破損稲佐馬込郷等江吹付、唐船繫御役所付両組共四人溺死、弔料其外大勢同断（中略）同十三日、紅毛船浮方見込之もの藝州廣島金子順左衛門カピタン人対談通詞僕ニ而入波戸場不残破損、町年寄福田源四郎紅毛船破船掛（中略）十一月二日ヨリ、御時計師小幡栄三修理方雇紅毛船浮雜費銀七拾七貫目請取、追々柵切崩土手取浚（中略）同十五日辰下刻紅毛船柵之内より引出浮方致（中略）同十日、辰上刻頃検使三頭御役所附十人、船番五人、町使四人、目安方書役二人、外科紅毛人 シイボルト調居候品、御調子之由ニ而出島江入、乙名部屋江御呼出、跡遊女禿為引払右部屋御封付、夫より御吟味種々御制禁物有之、酉上刻長崎ニ而御役所江持越、亥上刻又検使一頭御入蔵、改之儀強而御猶予願、同刻御用人御入、巖敷御詮儀日本大絵図シイボルト肌ニ付居候を差出、依之蔵御封被掛、丑上刻惣出払、此節隱密方小使召連年行司二人も入

とある。台風による出島の被害やオランダ船座礁の様子、浮上作業の経緯を記し、(和暦) 11月10日に、出島でシーボルトから日本地図を没収したことある。長崎の地役人である倉田は、実際を見聞していたと思われ、出島における日本地図没収を記し、誰がどのようにシーボルトを取り調べて日本地図を没収したのか、時刻まで克明に記録している。座礁したオランダ船からそれらが発見された訳でないから、そのような記事は日記に出てこない。

また、長崎奉行の指示で編纂された長崎の地誌『続長崎実録大成』(1839〈天保10〉年成立)の「紅毛船進港并雑事之部」を見ると¹⁴⁾,

文政十一戊子年、壹艘(コルネリウス・ハウトマン号)六月廿六日(西暦8月6日)入津

一、當秋出帆ノ船、八月九日夜、大風高波ニテ碇綱切、稲佐淵村庄屋前濱手へ打揚ル、依之同十一日、乗組阿蘭陀人上陸、且ツ銅石火矢綱具類積荷ノ分ハ同所濱邊空地エ取揚、竹圍取建置、右船浮方ノ手段阿蘭陀人共難任心底ニ付、市中并ニ廻船船方ノ者共ノ内存寄有之者アラバ、浮方申付度願出ノ処、市中大工職ノ者三人、浮方請負申出ル者アリテ、船際掘浚、且ツ柵堤築立等、夫々免許有テ浮方ノ術ヲ雖施、竟ニ浮方ニ不成、因テ十月ニ至リ、再ヒ甲必丹願訴ヘシ処、御時計師御幡榮三引請、浮方支度段願ニ任セ免許アリ、十一月十一日ヨリ浮方取掛リ、同十五日浮船ト相成、例ノ繋リ場へ挽直ス、右ニ付定例九月廿日湊出帆難致旨、前廉甲必丹因願、江府言上蒙御宥免、追々船修復成テ、十一月十八日ヨリ仕役始、翌丑正月十日湊出帆、同廿一日(西暦2月24日)沖出船帰国ス

とあり、台風によってオランダ船が座礁し、積み込んでいた石火矢など浜辺の空地に取揚げ、竹囲いをしてとり置いたこと、浮上作業のこと、オランダ船が定例より遅れて出帆したことなどを記している。当時の長崎における記録をすべて調査した訳でないので、確定はできないが、「台風-座礁-禁制品発覚」説は、長崎でなくその周辺で語られ始めたと考えられる。

〔3〕 創られた「シーボルト事件」

明治に入り、「台風一座礁—禁制品発覚」説は補強される。補強したのは田辺太一である。彼は幕末明治期の外交官僚であり、1898（明治31）年に『幕末外交談』を出版した¹⁵⁾。同書は、幕府の側から著した幕末史の名著とされ、自序によると「この本は知人の勧めにより、思い起こすままを書いて、一章一篇でき次第、読売新聞に連載し、それをまとめて本にした」とある。田辺はシーボルトの日本滞在中の活動、日本への貢献などを紹介した後に、

其（シーボルト）帰国の時、其荷物を積たる船の颶風の為に再び長崎に帰り来れるあり。幕府の法に、密商を防がんが為に、出港の船には、其積荷等を細査することなしといへども、入港の船は、必其検査を厳にせり、よつてその積荷の中、即シーボルト持荷の内より、当時国禁とせし秘籍を発見するを致し、竟に幕命を以て、出島に幽せられ、諸シーボルトに交り、殊に禁書等を贈りしもの、高橋作左衛門を初め夫々厳罰に処せられし後、凡一ヶ年にして、シーボルトの拘禁を解かれ、本国に帰るを得たれども、猶再渡を許さざるの申渡を得たり、実に文政十二年なり

と記している。これによると、ハウトマン号が台風のために一旦長崎港を出て再び帰って来たので、入港とみなされ、当時の法に照らしてその積荷が厳重な検査の対象になり、この検査によってシーボルトの積荷から禁制の「秘籍」が発見された、となる。田辺はハウトマン号の座礁を再入港と規定することによって、積荷検査の必然性、禁制品発覚を結びつけたのである。田辺説は呉秀三『シーボルト先生 其生涯及功業』にも採用されており¹⁶⁾、

シーボルト先生の荷物を積み居たる帆前船は将に出発せんとして未だ出発せずでありければ、暴風に煽られ驕波に揉まれ、一度出で、又戻り、遂に稲佐の割石に打付けられて舳頭はその或家の二階に寄りかゝれり。然

るにその当時の法規として、外国船の出帆にはその荷積は何なりとも問ふことなけれども、入港するものは必ずその積荷を悉く点検するのは法規なりしかば、此度も、この例にあてゝ、奉行所の吏員は一々その荷物を解き検むることゝなりしに、シーボルト先生の行李中よりは種々なる国禁の品々相尋ぎて露はれ出でたり

とある。呉氏は、田辺氏の言うことは「予が父母より直接聴き取りたるところも亦此の如くなり」としており、自分が親から聞いた話と同じであるという。この後、「台風一座礁—禁制品発覚」説は学術的裏付けを与えられ広がっていくことになる。

現在におけるシーボルト研究の入門書というべき板沢武雄『シーボルト』（人物叢書）は、田辺氏の言う再入港規定について、「暴風の中を一度出でてまた戻るといふことは常識からいってもありえない」と疑問を呈しているが、「台風一座礁—禁制品発覚」説を否定することなく、中島廣足『樺島浪風記』が「真相に近いようだ」とする¹⁷⁾。中島が記した「風説」は「定説」として受け継がれていくのである。

おわりに

シーボルトが1828年3月に高橋景保を通して間宮林蔵に贈った手紙が発端で幕吏の内偵が始まり、高橋は11月に至って逮捕された。一方長崎では、シーボルト乗船予定であったオランダ船コルネリス・ハウトマン号が9月に台風のために座礁した。10月にオランダ船の浮上作業をするが失敗、12月にはシーボルトの幽閉・尋問が始まり、日本地図などが没収され、関係する多くの日本人も処罰された。

1828年は全国的に自然災害が多かった年であり、特に9月17日（和暦8月9日）・10月2日（和暦8月24日）と続いて九州を襲った台風の被害は各地の記録類に多く見られる。当時の人々が、「シーボルト事件」を甚大な被害をもた

らした未曾有の台風と結びつけて「語り」はじめていたことを、小倉藩庄屋の日記は示している。こうした「語り」が長崎でなく、周辺地域で起こったことも特徴である。その後、そうした「語り」が『樺島浪風記』によって広がり、明治になり旧幕臣の著書に引用され、呉氏も採用して学術的に定着したのである。

[注]

- 1) 呉秀三『シーボルト先生 其生涯及功業』（吐鳳堂、1926〈大正15〉年）は、初版の『シーボルト』（吐鳳堂・英蘭堂、1896（明治29）年、菊版、120p）に資料などを追加し四六倍版で本文甲編 925p、参考書目 8p、索引 76p、史料乙編 492p、索引 31p、総計 1532p にして刊行された。その後 1967（昭和42）年～1968年、平凡社（東洋文庫）から本文編が『シーボルト先生その生涯及び功業』3分冊として復刻された。
- 2) 山口竜雄・中央气象台・海洋气象台編纂『日本気象史料』（中央气象台出版、1939年）
- 3) 荒川秀俊他編纂『日本高潮史料』（吉川弘文館、1961年、『日本気象史料』を包含するとともに、より広範な資料が加わっている）
- 4) 「前代未聞実録記」（国史研究会『浮世の有様』収録、1917年）
- 5) 戸田信一編『米府年表』（筑後史談会、1932年）。『門司叢書』（『門司郷土叢書』カ、門司郷土叢書刊行会、1931年～）。『福岡県災異誌』（福岡測候所、1936年）。松浦静山『甲子夜話続編』2（巻十八、平凡社、東洋文庫 364、1979年）
- 6) 中野禮四郎『鍋島直正公伝』（公爵鍋島家編纂所、1920年）
- 7) 颶風 熱帯低気圧や温帯低気圧に伴う激しい暴風をいう、台風。宮坂正英他「フォン・ブランデンシュタイン家所蔵 1827-1829年 シーボルト関係書簡の翻刻ならびに翻訳」（『鳴滝紀要』第19号、2009年）では「Organ」を「颶風」と訳している。
- 8) 日蘭交渉史研究会編『Japans dagh register gehouden in't comptoir Nangasackij』（『蘭館日誌』、1960年）
- 9) 彌富破摩雄『中島廣足』（厚生閣、1944年）。『日本古典文学大辞典』（岩波書店、1984年）
- 10) 『甲子夜話続編』2（巻二一、平凡社、東洋文庫 364、1979年、132～133頁）
- 11) 『中村平左衛門日記』（北九州市立歴史博物館編・発行、1985年）
- 12) 中原三十四編『年曆算』（福岡県遠賀郡岡垣町井ノ口文書、東尚印刷、1986年）
- 13) 「唐人番倉田氏日記」『紅毛庫雑撰』（「古賀文庫」23、九州大学記録史料館九州文化史資料部門蔵）。
- 14) 『続長崎実録大成（長崎志続編）』（長崎文献社、1973年）。田辺茂啓『長崎実録大

成（長崎志正編）』の続編として、長崎奉行の命を受けた小原克紹が1768（明和5）年編纂に着手，1839（天保10）年に本文10巻・年表3巻として完成。内容は正編の編纂方式を踏襲し，明和5年以降に関する，歴代長崎奉行や諸役所の改変といった行政，寺社の変遷，中国・オランダとの貿易やロシア船の来航といった対外関係などが詳述されている。

- 15) 田辺太一（1831〈天保2〉～1915〈大正4〉），1859（安政6）年外国方に起用，1870（明治3）年外務省，晩年は維新資料編纂委員（『国史大辞典』）。『幕末外交談』（富山房，1898〈明治31〉年，東洋文庫，1966年）
- 16) 呉秀三『シーボルト先生 其生涯及功業』237頁
- 17) 板沢武雄『シーボルト』（吉川弘文館，1960年，新装版1997年，104頁）

シーボルト事件関連年表

西暦	和暦 (旧暦)	長 崎	江 戸
1826年 4月16日	文政9年 3月10日		最上徳内江戸長崎屋でシーボルトに樺太の地図を見せる
4月18日	3月12日		高橋景保来訪
4月25日	3月19日		土生玄碩らに散瞳薬を使った実験をみせる
5月1日	3月25日		シーボルト将軍拝謁
5月7日	4月1日		高橋景保来訪, 蝦夷・樺太の地図を見せる, 下河辺林右衛門らも来訪
5月15日	4月9日		高橋景保来訪, 日本の地図を見せ, 後日の贈与を約束
7月7日	6月3日	143日間におよぶ江戸参府から出島帰着	
1828年 2月25日	文政11年 1月11日	出島にて, 江戸の間宮林蔵宛の手紙を書く	
3月30日	2月15日	シーボルト高橋景保宛手紙と間宮林蔵宛小包を長崎から発送	
5月11日	3月28日		江戸の高橋景保宅に手紙が届く, 高橋は同封の間宮宛の小包を届ける。間宮は決まりに従い小包を幕府に届け, 高橋の身辺を中心に幕府の探索が始まる。(取次ぎはオランダ大通詞助吉雄権之助)
7月7日	5月26日	Cornelis Houtman 号バタビアを出帆	
8月4日	6月24日	オランダ船入津の白帆注進	
8月6日	6月26日	入港手続, 風説書等作成	
8月8日	6月28日	貿易業務開始, 長崎会所	
8月9日	6月29日	個人荷物の荷揚げ開始, 脇荷蔵へ	
8月13日	7月3日	積荷目録の提出	
8月15日	7月5日	乗組員人別改	

西暦	和暦 (旧暦)	長 崎	江 戸
8月16日	7月6日	本方荷物の荷揚げ開始	
8月17日	7月7日	日本の七夕	
8月20日	7月10日	贈り物荷揚げ開始, 荷蔵 Doorn へ	
8月24日	7月14日	オランダ国王の誕生日	
8月25日	7月15日	日本のお盆	
8月27日	7月17日	誂物・脇荷物荷揚げ開始	
9月1日	7月22日	最後の砂糖積下ろし完了	
9月2日	7月23日	バラストとして銅500ピコ ル積み込み	
9月5日	7月26日	目利立合いで Doorn の荷 物分類	
9月9日	8月1日	日本の八朔, 上検使出島へ 来島	
9月13日	8月5日	甲板長オウエマンス死去	
9月16日	8月8日	貿易品の商人下見	
9月17日	8月9日	夜中大嵐, 長崎市内・出島 等被害甚大, Cornelis Hout- man 号稲佐へ座礁	
9月18日~27日	8月10日~19日	記録なし	
9月21日	8月13日	藝州廣島金子順左衛門カピ タンと紅毛船浮方について 対談, 町年寄福田源四郎紅 毛船破船場掛	
9月26日	8月18日	Cornelis Houtman 号の滞留 延長を申請 (特別日記)	
9月30日	8月22日	シーボルト, ビュルガーへ 引継ぎ準備	
10月1日	8月23日	ビュルガー公務開始	
10月2日	8月24日	再大嵐	
10月8日	8月30日	二度の大嵐について??	
10月10日	9月2日	福田源四郎, 浮上作業失敗 (特別日記)	
10月14日	9月6日	長崎奉行本多佐渡守来着	

西暦	和暦 (旧暦)	長 崎	江 戸
10月18日	9月10日	二人の長崎奉行出島来島	
10月19日	9月11日	長崎の祭り (くんち)	
10月20日	9月12日	本多佐渡守御用引請	
10月27日	9月19日	本年度の銅輸出減量通達, 銅産出不足の状況報告	
10月28日	9月20日	間宮林蔵宛の書簡, 贈り物の返却, シーボルトへの警告	
10月31日	9月23日	大草能登守長崎出立	
11月2日	9月25日	マスト用木材調査	
11月13日	10月7日	出島の荷物盗難事件, 検使による Doorn 捜査	
11月14日	10月8日	Cornelis Houtman 号浮上経費7700テール計上 (特別日記)	
11月16日	10月10日		江戸の高橋景保逮捕, 屋敷捜索
11月17日	10月11日		高橋作左衛門から大通詞末永甚左衛門, 小通詞助吉雄忠次郎宛の書面
11月27日	10月21日	シーボルト門下生 (高良斎, 岡研介, 二宮敬作等) へ警告, 出島出入禁止	
12月7日	11月1日	江戸からの急使が長崎着	
12月8日	11月2日	シーボルト事件の発覚を知る (通詞吉雄忠次郎日本地図の引渡しを要求, シーボルトは保留)	
12月8日	11月2日	御時計師小幡栄三銀77貫目請取	
12月16日	11月10日	シーボルトの尋問, 家宅捜査始まる, 通詞馬場為八郎・吉雄忠次郎・堀儀左衛門・稲部市五郎年番町年寄預けとなる	
12月17日	11月11日	出島捜査, 耐火倉庫の封印	

西暦	和暦 (旧暦)	長 崎	江 戸
12月21日	11月15日	Cornelis Houtman 号浮上	
12月24日	11月18日	9月18日以来積荷作業開始, 銅500ピコル積込み	
12月25日	11月19日	銅500ピコル積込み	
12月27日	11月21日	銅500ピコル積込み, Cor- nelis Houtman 号出島付近へ 投錨	
12月29日	11月23日	銅500ピコル積込み 通詞 (末永甚左衛門, 岩瀬弥十 郎, 名村八太郎)等入牢(同 道人預り)	
12月30日	11月24日	銅500ピコル積込み, シー ボルト尋問, 通詞等尋問	
1829年 1月 1日	11月26日	新年	
1月 7日	12月 2日	銅500ピコル積込み	
1月11日	12月 6日	贈答品の積込み	
1月13日	12月 8日	1826と1827年の取引価格と 同様	
1月23日	12月18日	銅500ピコル積込み, シー ボルト幽閉	
1月25日	12月20日	銅500ピコル積込み	
1月28日	12月23日	シーボルト出国禁止の通告, シーボルト尋問	
1月29日	12月24日	シーボルト尋問	
1月30日	12月25日	(2月13日)「正月10日」出 帆の通告受信 稽古通詞荒 木豊吉等町預け	
1月31日	12月26日	シーボルト尋問, 二宮敬 作・高良齋等町預け	
2月 1日	12月27日	銅1000ピコル積込み	
2月 2日	12月28日	銅輸出額7000ピコル決定 4人の通詞(茂伝之進・西 儀十郎・石橋助十郎・中山 作三郎)奉行所の命により シーボルト尋問のため出 島へ	

西暦	和暦 (旧暦)	長 崎	江 戸
2月4日	文政12年正月1日	日本の新年	
2月6日	1月3日	最後の銅積込み完了, 本多佐渡守からシーボルトへの23ヶ条の質問状	
2月8日	1月5日	シーボルトの所持品押収	
2月9日	1月6日	シーボルト日本への帰化を申し出, 却下	
2月12日	1月9日	シーボルトに対する尋問項目 (蘭文) を執筆 (シーボルトとメイランの署名あり)	
2月13日	1月10日	Cornelis Houtman 号出島出港, パーベンベルクへ投錨 シーボルトの妻たき奉行所にて尋問	
2月14日	1月11日	シーボルト所持品押収 (鞆鞆絵, 蝦夷人物絵, 地図2枚など都合30枚)	
2月17日	1月14日	シーボルト所持品押収 (東帯之図など)	
2月19日	1月16日	シーボルト尋問, 妻たき再尋問	
2月20日	1月17日	次年度注文書受領	
2月21日	1月18日	シーボルト資材倉庫捜査	
2月22日	1月19日	Cornelis Houtman 号, 全荷物積込み完了 甲板で「御条目」朗読	
2月24日	1月21日	Cornelis Houtman 号, バタビアへ出帆	
3月3日	1月28日	大通詞助吉雄権之助御用, 同道人預り	
3月4日	1月29日	シーボルト所持品押収 (葵紋付帷子, 九州辺の地図など)	
3月20日	2月16日		高橋景保, 江戸で獄中死 (45歳)

西暦	和暦 (旧暦)	長 崎	江 戸
	9月6日	大草能登守長崎着	
10月22日	9月25日	シーボルト「日本御構 (国外追放再入国禁止)」, 江戸参府の折の商館長スチュルレルに対しては渡来禁止	
	10月10日	本多佐渡守長崎出立	
12月30日	12月5日	シーボルトを乗せた船出島を出港	
1830年1月1日	12月7日	シーボルト長崎発	
1月10日	12月16日		土生玄碩改易
4月28日	文政13年3月26日		江戸で高橋景保等に判決が下る。
5月17日	閏3月25日	長崎で関係者に判決が下る。二宮敬作は江戸御構長崎払い, 高良斎は居所払い, 川原慶賀は叱責	
5月27日	4月6日		馬場為八郎・稲部市五郎・吉雄忠次郎等は江戸へ護送後地方の諸藩預り

〔参考〕

呉秀三『シーボルト先生その生涯及び功業』東洋文庫, 1967年

日蘭交渉史研究会『Japans dagh register gehouden in't comptoir Nangasackij』1960年

梶輝行「蘭船コルネリス・ハウトマン号とシーボルト事件－オランダ商館長メイランの日記に基づく考察を中心に－」(『鳴滝紀要』第6号, 1996年)

『紅毛庫雑撰』(『古賀文庫』23, 享和～万延年間, 古賀十二郎による「唐人番倉田氏の日記」・「文書科事務簿」・「犯科帳」などから出島に関する部分の抜粋)

「長崎奉行代々記」(長崎歴史文化博物館所蔵, 鈴木康子『長崎奉行の研究』所載)

シーボルト記念館『シーボルトのみたニッポン』2005年

片桐一男「事件の発端となったシーボルトの手紙－阿蘭陀通詞中山作三郎が手控えたシーボルトの手紙と鷹見泉石の手紙控－」(『洋学史研究』22号 2005年4月号)